

天理大学では2020年度秋学期の開始にあたり、感染症対策を整えたうえで、基本的に対面型の授業を実施することになった。久しぶりに学生たちの姿が戻り、賑やかさを取り戻したキャンパスは、すっかり秋模様で、図書館前の銀杏並木も次第に色づき始めている。しかしながら、今年度の秋学期から私が新しく担当する「大和の文化遺産を学ぶ3」（文学部共通科目）は、受講生が50名を超え、大学の基準に従って、オンライン（オンデマンド型）で行うことになった。同科目は1～5まであり、それぞれ、文学、語学、歴史学、考古学、民俗学を専門とする教員が担当して授業を行うのだが、私の場合は考古学の観点から大和の文化遺産を取り上げることになる。

初回の授業では、まず、柚之内キャンパス周辺がいかに文化遺産と歴史的環境に恵まれているかを確認する。今年6月、[AERA ムック]『大学ランキング2021年版』（朝日新聞出版）の大学図書館ランキングの総合評価で、天理大学が堂々1位を獲得したというニュースが伝わった。そのランキングに大きく貢献したのは、附属天理図書館の150万冊に及ぶ蔵書数と数々の稀覯書で、『日本書紀』（神代巻）、『播磨国風土記』など蔵書6点が国宝、86点が重要文化財に指定されている。リニューアルされた公式ホームページで指定書一覧を見ると、そのうちの一点、『源氏物語』（池田本、鎌倉末期写）は、つい最近、平成30年（2018年）に新しく重要文化財に指定されたことがわかる。このように、附属天理図書館は、まさに「やまとのふみくら」、書籍の博物館とも言える様相を呈し、年々その価値は高まるばかりなのだ。貴重な蔵書の数々は、フルカラーの高精細の複製影印を収録した『新天理図書館善本叢書』全36巻（八木書店）が刊行されるとともに、平成29年（2017年）、「天理図書館古典の至宝」として、新指定の『源氏物語』も含め、75点が附属天理参考館の企画展示室で一般公開された。

一方、附属天理参考館には、重要文化財に指定された考古資料の埴輪2点を含め、「世界の生活文化」「世界の考古美術」に関する多くの貴重な資料が収蔵展示されている。『大学ランキング2021年版』に大学博物館ランキングの項目はないが、もし、あったとすれば、上位にランキングされるのは間違いないと思われる。近年、多くの大学で、大学ミュージアムが設置されるようになってきているが、資料の充実度という点で群を抜いているからだ。欧米にならって、大学と図書館、博物館を並び立てた創設者、中山正善2代真柱の先見の明には頭が下がるばかりだ。

授業では、続けて、附属天理図書館・参考館の資料から、柚之内キャンパス周辺の文化遺産にちなんだものを1点ずつ取り上げて説明する。附属天理図書館のホームページでは、「やまとの名品」として貴重書を紹介する記事（養徳社『陽気』に連載中）が掲載されていて、その中から、第90回「内山永久寺之図」（安井文庫）を選択する。加藤重光氏（元天理図書館司書）が記事で解説するとおり、この絵図は、「廃仏毀釈」によって明治8年（1875年）に廃寺となった永久寺の江戸期の姿を明治に書き写した貴重な史料で、のちに石上神宮に移築されて摂社出雲健雄神社拝殿（国宝）となった鎮守拝殿の様子も描かれている。多数の堂宇が立ち並んでいた永久寺の跡地は、今は田畑となって考古学的な遺跡に姿を

変え、地表にはわずかに「本堂池」が残るだけだ。

附属天理参考館のホームページでは、「参考館セレクション」として、約30万点の収蔵資料からセレクトされた約100点が紹介されているのだが、今回のお目当ての資料は、「世界の考古美術」の「布留遺跡」のページに解説記事がある。また、ホームページのコンテンツ「参考館動画」でも、『天理参考館のこころ』（6）として、近江昌司・天理大学名誉教授が詳しく資料の解説を行っている。その資料とは、附属天理図書館の東南約800m、昭和56年（1981年）、親親競技場の建設に際して発掘調査が行われた柚之内火葬墓から出土した一面の海獣葡萄鏡だ。伏せた獣の形をした鈕の周囲に、4頭の獣を並べ、西アジアから中国に伝わった葡萄唐草文で全体を飾るほか、外周には、12羽の鶏と2匹の蝶が配されるという特徴を持つこの鏡は、唐代に愛好された海獣葡萄鏡の中でも中型品の優品だ。天理駅前のレプリカ（実物の5倍の大きさ）でもおなじみのこの海獣葡萄鏡は、これまでに18面の「同型鏡」が知られているが、そのうち3面が天理参考館に収蔵されている。

ところで、この鏡が出土した柚之内火葬墓の被葬者と推測されるのは、近江名誉教授によると、奈良時代後期に高級官人として活躍し、文人としても誉れ高い石上宅嗣卿だ。桓武天皇の即位間もない天応元年（781年）に53歳で没した石上卿は、逆算すると、天平元年（729年）生まれとわかるが、天平宝字6年（762年）、平城京内の邸宅内に建てた阿闍寺の傍らに、中国伝来の仏教書やその他の書籍を集めた文庫、「芸亭」を設置した。広く好学の士に開放された「芸亭」は、日本最古の公開図書館として知られ、昭和3年（1928年）、日本図書館協会、奈良県図書館協会等が発起人となって「石上宅嗣卿顕彰会」が発足し、昭和5年（1930年）に開館した天理図書館の前庭に、石上朝臣宅嗣卿顕彰碑が建設された。碑文の撰文を行ったのは、京都帝国大学附属図書館長だった新村出博士。図書館のホール内には石上宅嗣卿彫像も設置され、その説明板では、かつて山辺郡石上郷と呼ばれた同地との縁に触れている。



写真 図書館前に建立された石上宅嗣卿顕彰碑

ちょうど今年は、天理図書館の開館90周年にあたり、坂静雄・京都帝国大学教授の設計による図書館の建築そのものも、すでに歴史的建造物としての価値を有している。キャンパス内とその周辺の文化遺産に改めて注目する必要がある。